

思い出の Create

私の一編

(掲載は 50 音順)

戦後学制改革の落とし児の半生

荒川 眞仁

先日、高校のクラス会を開いた。会の名は「西陵四期会・傘寿の会」。名古屋市立西陵高等学校普通科4回生の同期会である。名簿会員110名ほど、出席会員34名、まあまあの出席率だろう。われわれの小学校入学から高校卒業までと、その後の環境はこの年代の典型だろう。この1年前でも、1年後でも経験し得ない経験をしてきた。

太平洋戦争終結前後のわが国の教育制度の変遷を語る上での貴重な経験の持ち主の集団である。私の義務教育の始まりから大学卒業までを振り返ってその異常さを理解していただきたい。

私は昭和15年（1940年）、最後の尋常小学校生として名古屋市立榎尋常小学校に入学。同16年、戦時下の学校制度への改革として、尋常小学校は国民学校に改組した。同年、児玉国民学校が開校したので学区編成替えで同校2年生に編入。この年、12月8日に大東亜戦争開戦の詔書が發布され、それまで、毎月1日に興亜奉公日として、護国神社遙拝をしていたのが、毎月8日に大詔奉戴日として朝礼で宮城に向かって敬礼をすることになった。19年秋ごろからB29による夜間の空襲の頻度が増してきた。そのころ、集団疎開が始まった。いろいろな事情で、集団疎開へ行かなかった児童も、20年4月からは名古屋市内すべての国民学校児童は集団疎開に行くことになり、虚弱児で同行を許されなかった私も叔父を頼って高蔵寺の高座国民学校へ縁故疎

開に行った。

授業はともかく、農家のお手伝いをするというので、いろいろな場で農業奉仕をしなければならなかった。田植えの経験はなし、夏休みの宿題が干し草15貫の供出には参った。が、終戦と同時に帰宅することになって、9月始め、名古屋市の児玉国民学校へもどったが、当の学校は5月17日名古屋城空襲のときに全焼し、集団疎開から戻ってくる当てはなく、当分自宅学習ということになった。

12月になってやっと、学校が帰ってきて、2教室だけの急造のバラック教室で、5,6年生が午前午後の2部授業を、下級生は少し離れた軍需物資などの倉庫改造教室での授業が再開された。落ち着かない環境下で、中学進学など念頭になかったが、中学進学の話が具体的になってきた。男子は宮様が通われた学校ということで明倫中学に、女子は近くの県立第二高女の人気が高かった。

私は第1希望に愛知県明倫中学校を、第2希望に校地がその隣りにあった東海中学校を選んだ（実は親が決めたのだが）。明倫は競争率が高く、1次試験と2次試験があった。児玉国民学校からは5名の受験者があったが、幸い全員合格。喜び勇んで入学したものの、物資不足で、制服制帽を満足に整えることができず、真鍮製の校章は手に入らず、布の刺繍であしらったものが帽子屋には用意してあった。多くの同級生が近所の卒業生や兄のお下がりを手に入れていた。私は、父が工

面してくれた。

入学して間もなく、翌年からは中等学校は募集しないというわさが流れた。われわれは、下級生を持たないということである。占領軍の方針で、戦前のわが国の学校制度を根本的に改革して、米国の多くの州で実施している六三三四制に移行させるということで、昭和21年度をもって、戦前の尋常小学校、中等学校、高等学校、大学という線に並行していた国民学校高等科、青年学校、師範学校、専門学校などの学校を廃して、六三三四の単線に統合するというものである。したがって、昭和22年4月にまだ十分設備は整ってはいなかったものの新制中学校が発足している。その後順次、新制の高等学校・大学が発足した。

さて、私たち昭和21年に旧制最後の中学生として入学した生徒は、22年の春は下級生を持たない愛知県立明倫高等学校併設中学校第2学年ということになった。終戦で復活した夏の中高等学校野球の応援の練習は厳格な上級生の監視のもと、授業後全生徒参加で展開された。今でいう部活動も順に活発になり、今までイモ畑にされていた土地を平らにならし、石ころを除くために篩ふるいにかけ汗みどろでの作業が終わりに近づいた8月の末ごろ、新制高等学校統合の話が出てきた。せっかく整備した運動場を他校に明け渡し明倫は愛知県立第一女子高等学校へ統合されることになったのだ。

「高校三原則」の呼び声で、小学区制、男女共学、総合制を完全実施するため、昔の中等学校、女学校、職業学校を統合して、通学区域をできるだけ小さくして、同一地域に住む生徒は専攻のいかんを問わず同一の高校に

通学させるための学校制度に改めるという方針が占領軍から出され、愛知県内の公立学校は設置者の別にかかわらず統合されることになった。わが明倫高校の校長織田圓城氏は新制高校への改組の方針が出た時から、占領軍の方針に強く異議を申し出たため、校長の辞令が出されず「校長事務取扱」として22年から過ごしてこられたと、最後の県立第一高女の校長であった遠藤慎一氏から、後日、直接お聞きした。

新制高校が発足した1年半後夏休みを終えた昭和23年9月、授業もそこそこに建中寺西の山口町から二葉町の県一女高への引っ越し準備に忙殺されることになった。しかし、明倫高校生徒のうち併設中学3年生のわれわれは、住居地の近くの新たに統合してできる高校に併設中学生として分散して転校することになっていたのである。寄留などで居残った者もいたが、大部分がせっかく大望を抱いて通った母校を離れ、希望もないまま指定された住居地近くの学校へ散って行ったのである。

現在の高等学校という名称が使われ始めたのは、昭和22年の4月だが、当時の学校は、単に旧制の中学校をそのまま高等学校という名に変えただけで、実態は旧制中学の4年生が高校の1年生、5年が2年生になっただけで、旧制2,3年生は併設中学2,3年生と呼ばれることになっていた。校長会名簿でも、実態として戦前から続いている高校の発足が昭和23年になっているが、これにも2種類ある。23年10月に統合した旭丘・明和高などと、単独校で継続したため23年4月からこの名称が始まっている昭和高校などと。

10月に高校三原則により、第1回目の統合

が行われた。しかし、学区制が施行されたのは併設中学生だけだった。総合制も、本格的には翌24年度からで、多くの学校に、商業・家庭の課程が設けられた。普通課程、家庭課程などといった。一部の学校に工業・農業課程が、25年度から美術・音楽課程を設ける学校ができた。

10月から、われわれ併設中学3年生だけが、占領軍の指導で統合された地域の学校に通うことになった。私の場合、愛知県立名古屋西高等学校併設中学校だった。ここは、通称「県二高女」とっていた女学校だった。実は23年10月は高校統合の第1段階で「三原則」も中途半端なものであった。上級生は「県二」に入ったお姉さんばかり。男子トイレも急造のものが隅っこに、ちんまりと。校舎も戦災にあい、併設されていた焼け残った鉄筋部分を囲っただけのもの。運動場は野球場でいえば内野部分だけの広さ。

10月1日金曜日、今まで通学時、電停まで堀沿いに歩いていた女学校の校門を初めてくぐった。クラス分けではA組、担任は浦野先生、元名古屋新聞の記者で英語専攻、気さくな愉快的な先生だった。校長は県一高女から引き続き浅井峯治先生。併設中学3年は6クラスだったか？

A組の隣の教室は、後に県立短大に吸収される専攻科の姉御の部屋。元わが家の裏にお住いの高木先生のご長女もご在籍。高木先生はわれわれの理科の先生だった。クラスメートは男女半々、男子はもと明倫中、中川中のものが半数ぐらい、女子は地元の県二が多く、市一、県一など。同級生の中には、大須事件の被告人だったが国立大学の法学部教授に

なった鈴木孝志君（中川中）、東海銀行で名を馳せた水谷研治君（明倫中、現東京福祉大教授）は、中日新聞で従軍記者としてベトナムに派遣され、共産軍に拉致されたときのネタを材料にして特ダネ記事を書き日本中の話題になった佐橋嘉彦君（明倫中、現CBC常勤監査役）などいろいろな人材がいた。

学習内容は、女学校より中学校の方が進んでおり、毎日の授業は復習のようなものだった。遊び半分の毎日が続き、学年末になると、また高校の再統合の話が出て、中3だけであった小学区制が、高校までの全学年を対象とする編成替えが行われることになった。新年度から、名古屋西の併中3年は、松蔭、西陵へ出ていくものと、名古屋西に残るものとに分かれることになった。私は昭和24年4月から、元名古屋市立第二商業学校（通称市二商は前年10月、市一高女と統合菊里高になっていた）の校舎のあった名古屋市立西陵高等学校の1年生に入学することになった。西陵高は同じく10月に市工芸を中心に3校が統合してできた学校で、工業・商業・家庭の3課程に24年4月から普通課程が併設されて運営されることになった。

半年でまた追い出されたわれわれは新しい学校へ来てもいつまでいられるのか、落ち着かないまま、不満満々で登校した。明倫の校章をいやいや名古屋西の校章に変えた後、また3Sの新しい校章を強要されることになった。したがって、多くの旧友が元の、望んで行った中学校の校章や制服のボタンを持ち出していた。気の毒ではあったが、当時の生活指導担当の先生方には、ご苦勞をおかけしたと今頃になって反省している。高校を出てか

らよく聞くことであるが、4年間の最下級生生活と歩んできた環境などでわれわれ新制高校4回生はどこを卒業したのも、やんちゃでわがままでとの評判は定着しているようだ。それでも、何かに向かってまい進する根性は座っているつもりではあるが—。

名古屋西から西陵へ移ったということは、今風に言えば、めでたく高校に進学したことになるのだが、私たちにはそのような意識は毛頭なく、あきらめにも似た気分で通学することになった。級友の半数近くが併中からの続きで、あと半分がまた別のところを追い出されてきた連中であった。西陵高校は総合制高校の典型で、校舎の半分は工芸校の実習施設で、工業課程の中に建築、金工、図案などの小学科がある。普通課程は各学年4クラス、商業2クラス、家庭1クラス。教職員数120名余で講堂が職員室になっていた。われわれの教室は校地の片隅のテニスコート脇に建てられたバラック小屋。教室が街路に面していて、授業中に窓から手を出せば、アイスキャンデー屋さんが応じてくれるという便利さ。翌年は工芸課程が独立して出て行ったので、本校舎に入れてもらえた。

カリキュラムは2コースに分かれ、ほとんどが選択必修になっていて、人員に偏りがあってもそのまま実施されていた。英、数、国にはそれほどの選択の幅がなかったのでおおむね均等に分かれていた。表向きのカリキュラム編成は標準的だが、たとえば、数学の授業内容は1年2年で解析Ⅰ、Ⅱを受け、3年に幾何を受けることにして、学年の後半は解析Ⅱの復習や問題演習に時間をまわすというようなことをしていたので、公には認められな

い便法だったのであろう。おかげで、くわしい数は記憶にないが、名古屋大学希望者の合格率が70%近くだったので、他校に比して群を抜いていたと当時の新聞が伝えていたことを覚えている。

名古屋大学に入ってみて感じたことは、帰ってくるべきところに帰ってきたという気分を味わうことができた。というのは、顔を合わす多くの新入生が4、5年前まで机を並べていた明倫の旧友たちだったからである。

小学校3校、中高3校、いずれも世間様のご都合で転校させられた集団であるわが西陵4期生は普通課程卒業の誇りを持って、世に出たのだが、卒業してからも冷遇され、母校は昭和32年菊里から分離した旧二商に乗っ取られ商業科単独校になってしまった。さらに、平成17年商業科も廃止し、総合学科の高校になってしまったのである。しかし、教員生活38年とその後の生活は、この日集まった34名とその前に希望を抱いて学んだ明倫の友人やその関係者とのつながりのおかげでなし得たものが多かった。我らの生涯に悔いなしと語り合って散会したのだった。

(No.220 平成25年6月)